

はじめに

川口 裕司（拠点リーダー）

2005年1月27日（木）、同28日（金）、2月10日（金）に、東京外国語大学大学院の二つの21世紀COE「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」と「史資料ハブ地域文化研究拠点」、さらに総合文化研究所の共催により、21世紀COEプログラムの総合シンポジウム「グローバリゼーションと多文化的想像力」が開催されました。総合シンポジウム全体の趣旨については、亀山郁夫氏の総括と提言(本書pp.9-10)を参照ください。

21世紀COEプログラムの中心的目的の一つとして、各分野における高度な研究能力を有する若手研究者の育成があります。総合シンポジウムでも、1月28日に「グローバル化の現実と文化の基層をみつめる人文社会研究」と題する若手研究者による研究報告会が行われました。本書に所収の研究報告は、「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」の若手研究者たちの報告です。

当日の司会進行は、東京外国語大学外国語学部教授の高垣敏博氏が行いました。全体で六つの研究発表があり、質疑応答が行われました。そのうちの五編が本書に掲載されています。それぞれの内容を以下に概観しておきます。

時田伊津子氏は、本学博士後期課程を修了し、現在は本学の非常勤講師を務めています。氏の「他動詞文の無生物3格と中域語順(2)」は、先行研究を参考にしつつ、他動詞文における無生物3格の中域語順を分析しています。これまでの研究では、語順決定要因に優先順位が設けられ、それに従ってコーパスデータを調査したところ、代名詞や冠詞など、要因の上位に属す特徴をもつ文の傾向は、提案されている基本語順と一致していました。ところが、第四の要因に該当する統語的語順は、コーパス事例では統一的特徴が見られず、文の意味タイプにより傾向が異なることが実証されました。この点から、無生物3格を伴う他動詞文では、文の意味タイプも語順の決定に密接な関連があると言えます。

石井康毅氏の「英語の不変変化詞に見られる意味の階層性—メタファーの観点より—」は、英語の不変変化詞の意味には、中核語義として物理空間に関する意味がまずあるのではないかと、それを検討もせず自然だと考えるのは不合理であると、中核的語義を積極的な動機付けにより明らかにしようとする研究です。氏は、その中核語義から「語彙化されたメタファー」、さらに、いわゆるメタファー・イディオムのレベルへと、非可逆的な一方向性を持ったメタファー拡張の関係が存在するということを、心理言語学の実験データや各種コーパスのデータを基にして論じています。英語学習者が前置詞について感じる困難さの原因の一つは、この意味の階層構造にあるのではないかと氏は指摘します。

須藤秀樹氏は、本学の博士後期課程に在学し、2005年度からは学術振興会特別研究員(21世紀COE 枠)として、語彙モジュールの設計と開発にあたっています。氏の研究テーマは、現代漢語の動詞を、自動詞・他動詞の対立を前提としない語彙アスペクトに拠って分類することです。「語彙アスペクトからみた現代漢語の動詞分類について」は、一見すると同じ進行相を表す形態素“在”・“着”について、氏は、“在”には動詞の表す事象を前景化する統語機能があり、“着”には動詞の表す事象を背景化する統

語機能があると考えます。また“在”・“着”と共起関係をもつ動詞群の語彙アスペクトを活動(activity), 完成(accomplishment)と考え, “在”・“着”と共起しない動詞群は, 状態(state), 達成(achievement)の語彙アスペクトを表すと考えます。

安根姫氏の「統辞論的観点から見た韓国語の形容詞 *manhta* と日本語の形容詞「多い」—形容詞の述語用法と連体修飾用法に着目して—」は, 韓国語の形容詞 *manhta*(lit. 多い)と日本語の形容詞「多い」を対照分析し, 日韓の語彙の対照的記述の方法論を模索した論文です。氏は実際の言語資料を計量的に分析し, それに基づいて, *manhta* と「多い」の実現する構造を「Xが多い(NA型)」、「Xが多いM(NAN型)」、「多いX(AN型)」の三つに分けて考察します。さらに, それぞれの構造について,*manhta* と「多い」と共起する名詞句との関連性に注目しつつ, 他の形態・統辞論的特徴についても論じています。いわば, この論文は, *manhta* と「多い」の語彙的側面と統辞論的側面を分析しつつ, 対照言語学的観点から単語が実際の文の中で, どのような現れ方をするのかを記述した論考と言えるでしょう。

木山幸子氏の「日本語の雑談における不同意の相互作用—「儀礼的不同意」に焦点を置いて—」は, 日本語の雑談における「不同意」を分析の対象として, 話し手と聞き手の相互作用という観点から親疎間を比較しています。氏は, 不同意の対象となる先行発話の内容が, 先行発話の話者自身をマイナスに評価している場合, および相手をプラスに評価している場合の不同意を「儀礼的不同意」と呼び, それ以外を「実質的不同意」と呼んで区別します。この分類の上にならば, 不同意とその反応を分析した結果, 「儀礼的不同意」に対する反応について有意な親疎差が見られました。このことは, とりもなおさず, 単なる発話レベルの分析だけでなく, 談話レベルの視点を取り入れることが重要であることを示していると言えるでしょう。

「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」では, 10月4日にも院生を中心とする研究報告会を企画し, こちらでも7件の報告が行われました。今後も拠点では若手研究者の育成に力を注いでいくつもりです。